

「イマドキの若者」が求める授業の創り方 —主体的な学びを促進させるコツについて考える—

【企画者】 清水 亮(神戸学院大学)
【司会者】 清水 亮(神戸学院大学)
【話題提供者】 上野寛子(明治学院大学)
岩井 洋(帝塚山大学)
清水 亮(神戸学院大学)

1. はじめに：企画の趣旨

大学の教育力向上には、学生と教職員の相互刺激の総量拡大はもちろん、学びの主権者である学生が、お互いに刺激しあいながら学び、自らの知識・技能を高め、それを表現する力を磨き、よりよき自己実現に誘う授業デザインが不可欠である。学生が考える理想の授業を創作するコツを明治学院大学の上野寛子先生に、大学を挙げて、学生の主体的な学びの推進の先頭に立たれている帝塚山大学学長の岩井 洋先生に帝塚山大学の事例を、そして清水が、神戸学院大学での実践を紹介し、「イマドキの若者」が求める授業を、フロアと共に考えるワークショップを目指したい。

2. 話題提供1

「学生が考える理想の授業を創作するコツ」

明治学院大学

全入時代における入試形態の多様化は、学習歴の違いに大きな差をもたらし、基礎学力や学習意欲の面で問題のある学生をより多く抱える事態をまねいている。こうした学生も含めて授業を行うには、教員による授業改善の努力が不可欠であることはいうまでもない。近年では、高校から大学へのスムーズな接続として入学前教育が多く実施されているが、主体的な学びへの転換をはかるといっ

りも、学力を補ったり、大学生活に慣れるといった内容が多く見受けられる。大学入学後はできるだけ早期に、意欲的な授業参加態勢を築いていくことが重要であるが、社会の変遷とともに生きる私たちもまた、イマドキの若者と同じく、少なからず時代の影響を受けている。イマドキの学生が求め、期待する「大学の授業」を把握することにより、自分が受けた時代の大学教育が今の時代においても適切かといった疑問をもち、授業内容の検討や授業形式を見直していくことが、主体的な学びを促進させるためにとても重要なことといえるだろう。

主体的な学びの例として、さまざまな科目でレポート課題やプレゼンテーション課題が出される。しかし、調べ学習の基礎、レポートライティングやプレゼンテーションなどのアカデミック・スキルに関する訓練が不十分である学生が多く、安易な情報の選択や剽窃も見受けられる。また、授業でブレイン・ストーミングやディベートなどを取り入れた場合でも、授業外で事前学習を十分に行う習慣が身につけていなければ、有意義な授業にはならない。こうした問題を解決するには、基本的な学びのスキルを習得し、論理的思考を深める訓練が必要である。そこで、2012年度に「知的世界を楽しむためのアカデミック・

スキル養成講座」を開講してみたところ、毎学期抽選になるほど好評を得てきた。

授業は協同学習形態であり、準備(授業外学習)と連携(協同)を必須とする。テーマは今話題になっているもので、中長期的に取り組めるものをこちらで設定し、学生は各自が取り組んでみたいテーマを選んでグループイングする(4名/1グループ×4グループ、1クラス16名)。授業開始後1/3の期間は図書館やインターネットを使った情報検索の方法を毎週20分程度のレクチャーにより学んでいき、その後は、エクセルやパワーポイントの使い方、プレゼンテーションの基本など、大学生の学習に必要なスキルを3カ月かけて効率的かつ横断的に習得させていく。また、授業外学習によって各自が収集してきた情報を毎週の授業で精査および整理し、アクティブな議論を展開しながら多角的な視点で深く掘り下げて「学生たちが考える理想の授業」を創作させていく。最後には実際に授業を行い(1チームにつき40分)、ベスト授業賞獲得を狙うという流れである。徹底的な情報収集とチームワークが成功の鍵となる。

この授業では常に「自分が受けてみたい授業内容を創ること。日頃受けている授業で良いと思う点は積極的に取り入れ、ダメだと思える点はその逆を考えて授業を構成するように」と指示している。最終回ではベスト授業賞を獲得したチームが公開授業を実施しているが、参観しに来てくださった教員や職員からも高い評価を得ている。残りの時間で「自分たちが考える理想の授業」についてあらためて付箋に書き出してもらい、カテゴリー分けして模造紙に張り出す作業を行っている。学ぶ意欲がそがれる授業を多く履修している学生からはその逆の考えがたくさん書き出され、良いと思える授業を受けている学生には「その何が良いと思うのか(=どんな要素が良いと感じるのか)」まで書かせている。履修した学生からは、「この授業を必修科目にすべき

だ。1年生の時点で全学生に受講させたら授業の受け方も変わるし、スキルも身につくからレポート課題などもきちんとこなせるようになる。逆にそうした課題をこなすことによって本当に力がつく」、「公開授業だけでも教職員研修の形で参観してほしい。大学の授業をもっと魅力あるものにしてほしいから」といった声が毎年あがっている。調べ学習の重要性はもちろんのこと、アウトプットは「授業実践」に設定したが、レポートにしても基本的な作業は同じである。学生にとっては授業外学習時間の面できわめて負担が大きいが、得るものが多大であり、どんな学生でも1つのテーマを半期の間掘り下げ、最後には4つのテーマについての授業を学ぶことができるので、さまざまな知識も身につくというお得な科目である。

自分が聴いてみたい授業を実践することは、授業を構成し実践する側に立つことにより、日頃受けているさまざまな授業に対する見方をも見直す機会となる。たとえば、授業を行うには生半可な調べ学習では無理であり、綿密な下調べが必要であることを知るので、「わかるように教えるって本当に大変だ」と感じるようになる。

学生の主体的な学びを促進させるには、まずは「学び方の基本を身につける」ことが一番大切である。同時に、授業の舞台裏(授業創作)を体験させることにより、授業に対する見方や関心を高めることができる。各チームの進行状況にあった授業の進め方、タイミングをはかったスキルの教え込み、理解を深める学習課題(テーマ)を適切に設定することにはいつも苦勞するが、イマドキの若者の授業参加姿勢を変えていくには大変効果的であることはこれまでの2年半の試行で実証されている。この体験を通して得たさまざまな気づきや厳しい視点を身につけた学生が増えていけば、イマドキの若者にあった大学教育が再構築できるかもしれない。

受講後は、小学生や中高生向けにアレンジし直して、ボランティアで出前授業を行いたいと申し出る学生も毎年いるほどである。春学期に履修した学生が、秋学期は単位不要でいいのでクラスに入れてほしいとの要望もある。ベスト授業賞を獲得したチームは入学前教育でも授業を行い、大学生の素敵な後ろ姿を見せている。さまざまな効果を生み出しているこの授業(「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」)において見出した知見を、イマドキの若者が主体的な学びを促進させるコツとして議論した。

3. 話題提供2

「帝塚山大学の事例」

帝塚山大学

「イマドキの若者」の気質は、ネガティブとポジティブの両面性をもつといえる。ネガティブなものは、「ちっぽけなプライドと根拠のない自信」と表現でき、ポジティブなものは、「体温が低いが、沸点も低い」と表現することができる。すなわち、前者は、プライドだけは高く、根拠のない自信をもっている学生像である。これは、初年次教育、リメディアル教育にはじまって、就職活動支援にまで大きな影響をおよぼしている。たとえば、リメディアル教育にみられる「やりなおしスキーム」(高校までの勉強の繰り返しを押し付ける方法)は、学生の「ちっぽけなプライド」を傷つけることになる。また、就職活動においても、「根拠のない自信」をもった学生が、1,2度の不採用通知で自信を喪失する例が多くみられる。一方、何事にも興味を示さない「知的末端冷え性」のようにみえて、焚きつけるとすぐに燃えはじめる、いわば「沸点が低い」という学生像もある。このような両面性をもつ「イマドキの若者」に対応するために、帝塚山大学あるいは話題提供者個人として、どのような教育を展開してきたのかについて報告した。

「ちっぽけなプライドと根拠のない自信」への対応として、大学全体というよりは個人の経験として、1年生のゼミにおける専門的な文献(たとえば『ハーバード・ビジネス・レビュー日本版』)を活用した教育方法があげられる。ここで狙いとしているのは、最先端の学術誌を読んでいるという優越感を学生にあたえるとともに、実は、国語の読解力を育成することである。つまり、学問的知識の伝達よりも、短い文章の要約やグループ内での意見交換を通じて、大学生のための日本語表現を学習しているのである。

一方、「体温が低いが、沸点も低い」学生への対応として、帝塚山大学ではプロジェクト型学習を推進している。2012年、学長に就任して以来、「プロジェクトの帝塚山」を標榜してきた。それは、学内における多くのプロジェクトが成果を収めつつあったことと、うまく焚きつければ、すぐに燃えあがるという学生の気質を実感していたからである。具体的なプロジェクトの成果としては、大学創立50周年を記念して、地元企業とのコラボレーションで生まれた「学長ラムネ」や「梅ラムネ」、地元パティシエとのコラボレーションで生まれた就活応援スイーツ「Lucky Financier 怡予感(いよかん)」の製品化などがあげられる。また、奈良県の政策提案コンテストで優秀賞を獲得した、スマートフォン・アプリを活用した若者誘客事業は、奈良県の予算として事業化された。さらに、本年開設した文学部文化創造学科の1年生は、他学部の上級生とともに、地元酒造会社と連携し、帝塚山大学ブランドの日本酒の商品開発に取り組んでいる。

このようなプロジェクト型学習は、2・6・2の比率に分かれる学生のうち、自律的な学習者の2割、要支援学生の2割を除いた、ボリュームゾーンの6割にあたる学生に対して、特に効果的であることがわかっている。さらに、プロジェクト型学習は、「社会人基礎力」

の名称で個別の力として語られることの多い様々な力を総合的に育成することができる。

さて、「ちっぽけなプライドと根拠のない自信」や「体温が低い、沸点も低い」学生気質への対応を通して、教員の意識・技能、教育支援体制の課題もみえてきた。

「学生の多様化」という言葉が、高等教育を語る際の枕詞になって久しい。確かに、10年前の学生と比べれば、学力・意欲・学習歴の点において多様化しているともいえる。しかし、「学生の多様化」という言葉が〈多様化→対応しきれない→お手上げ〉という連想を生み、「イマドキの若者に対応しきれなくてもしょうがない」という「言い訳」を、教員側に用意した側面も見逃せない。さらに、プロジェクト型学習を通して、「沸点が低く」燃えあがりやすい学生の実態に接すると、「学生の多様化」を「言い訳」にして、学生を焚きつけようとし、あるいは焚きつけかたがわからないという、教員の実像が浮かび上がってくる。そこには、伝統的な一方向的授業で教室空間をコントロールしたいという欲求と、学生をアクティブに学ばせることへの自信のなさがみてとれる。

これに対しては、プロジェクト型学習に理解を示すとともに、推進できる複数のキーパーソンを巻き込むことと、プロジェクト型学習に興味をもちながらも、独立して実施できない教員に対するOJTを推進することが重要であると考えられる。プロジェクト型学習は、ひとつの教育メソッドにすぎないが、大学、教職員、学生、地域等が連携することを通して、大学自体の教育力を向上させるとともに、教員に対するFD効果をもつといえる。

「イマドキの若者」という問題設定をすると、若者だけが変化し、それに対して悪戦苦闘する大学や教職員の姿をイメージしやすい。しかし、実は、「イマドキの若者」は「イマドキの教員」を映す重要な鏡であり、若者が変化し多様化したという側面だけに注目するの

ではなく、その変化に対して、ものの見方や考え方、さらには身体実践においても対応しきれない教員の姿にも注目すべきである。

最後に、本題とは若干ずれるが、教員側に「対応しきれない」という「言い訳」をさせないためにも、また大学が適切に学生を支援する施策のためにも、各大学において、どのような視点からみて、どの程度学生が多様化しているか(あるいは多様化していないのか)について、実証的に調査する必要がある。これは、いわゆるIR (institutional research 機関研究)の重要なテーマのひとつであるといえる。

4. 話題提供3

「インタラクティブ & ピア・ラーニング」

神戸学院大学

2014年度にスタートした現代社会学部の防災学科の1年次生の英語科目「標準英語 Ia」では、授業の中で、復習できる材料を提供し、シャトルカードで、1人1人を励まししながら、授業を進めることにした。単語リストを毎回用意し、授業時間内に、グループで、単語リストを完成させ、その後、全体で、リストを再確認。その後、本文の文章と問題に着手し、全体で考える手法を導入した。

2年次配当の「欧米の社会と文化 II」と「現代の国際関係」の授業は、富山大学の橋本 勝教授の橋本メソッドを活用しながら、授業の中で、毎回、テーマに関する2回プラスの4名ずつのグループディスカッションと全体討論、13回の授業(初回と最終回を除く)の中、2回のレジュメを作成・提出、そして授業中に、最終週のグループが選んだテーマに基づくプレゼンテーションの準備の時間を設けた。どちらの授業のシャトルカードにも、今までなかったインタラクティブな授業なので面白いとか、ディスカッションの中で、いろいろな発見があるという声が多く、留学生にも好評だった。

5. おわりに

「イマドキの若者」が求める授業の創造には、学生と真摯に向き合い、彼らの興味や関心を念頭に置きながら、大学コミュニティの構成者(学生・教員・職員・地域)の相互刺激を活用し、学生が、知らず知らずのうちに、

主体的に学んでいける仕掛けを考えることが不可欠である。このラウンドテーブルが、その機会となり、「イマドキの若者」が求める授業の創造へのヒントを、ポケットに入れていただけたなら、うれしい限りである。